

シリーズ われらイキイキ専修人

越谷アルファーズ キャプテン

喜多川 修平 さん

勝負どころで何をすべきか、
それをコートで体現したい

JBL、bjリーグ、Bリーグ(BI)の各リーグで優勝を経験。40歳にして、いまなお一線で活躍——きっとエリート街道をひた走ってきたに違いないと思って話を聞けば、必ずしもそうではなかったようだ。

上手くなりたい、その一心で歩んだバスケ人生。一つ一つ成長を重ね、たどり着いた現在地。

きたがわ しゅうへい

1985年10月1日生まれ。神奈川県。桐光学園高校を経て、2004年専修大学経済学部入学。卒業の08年にアイシン精機に入社し、企業チームでプレー。15年、bjリーグ琉球ゴールデンキングスへ移籍、優勝。17年、Bリーグ栃木(現宇都宮)ブルックスへ移籍、ベスト3P成功率賞受賞。2021-22シーズンに優勝。2023年、越谷アルファーズへ移籍。ポジションはSF。185cm。



昨年11月5日川崎戦、越谷市立総合体育館(写真提供:越谷アルファーズ)

きっかけは兄、バスケってカッコいい

小学校までは野球少年。バスケットボールを始めたのは中学からでした。4つ上の兄がバスケをしていて、その試合を見て、バッシュのキュッキュツという音や、体育館の汗臭さみたいなものも含めて、カッコいいと思ったのがきっかけで、バスケ部に入りました。

いわゆる普通の部活で、顧問の池田先生もそれまでバレーボールを教えていた方で、一緒に成長していくという感じでした。上手くなりたくて、部活が終わっても家の前の電柱をゴールに見立ててシュートしたりして、夜遅くまでやって、近所の人にめちゃくちゃ怒られたことも(笑)。

高校は桐光学園です。今は全国大会の常連ですが、当時はまだ全国に行ったことがなかった。でも、レベルの高い選手が多く、それに追いつきたいという思いで毎日やっていました。その頃はまだバスケはメジャーではなかったので、プロを目指すという考えはなかった。でも、大学でもバスケを続けたいと思っていました。

専大の魅せるプレーに一目ぼれ

高3のとき、どこの大学からも声はかかりませんでした。たまたま家の近くでやっていた専大の試合を見て、強くて、魅せるプレーに一目ぼれして、ここでプレーしたいと思いました。指定校推薦で進学し、入学後にト



↑大学4年次、バスケットボール部での練習中



↑生田キャンパス総合体育館にて。今回の取材で、卒業以来17年ぶりの来校

ライアウトを受けて入部しました。

当時の専大は関東大学リーグでも常に上位の強豪。新関光一総括、中原雄監督の下、ダンク行けるなら行けという方針で、ノールックパスもしょっちゅう。負けたくない人たちの集団なので、練習はパチパチで、けんかになるくらいの熱さでやっていました。

1年ではベンチに入れず、監督に「僕を育ててください」って直談判したこともあり。当時、僕は憧れの先輩を真似たプレーをしていましたが、監督から言われたのは、「おまえはいいシュート持っているのだから、喜多川修平を伸ばせ」と。あとと言われたのが「シュート10本撃って、100本外してこい」と。これはちょっと意味わかんなかったですけど(笑)。外しても気にせず撃ち続ける、ということと受け止めました。

全日本学生代表に入ることもあり、4年次にはあるチームから「興味がある」と言われていたので、そこに行けると思っていました。でも、形だけと思って受けたトライアウトで落ちて…。行き場がなくて困っていたとき、当時、女子バスケット部監督の児玉さんが親交のあったアイシンの鈴木HCに僕を推薦してくれて、JBLの強豪アイシンシーホースへの入団が決まりました。

30歳でアイシン退社。プロとして琉球へ

アイシンでは社員ですから午前中は働いて、昼から練習して。シーズンオフはフルタイムで仕事するという生活です。ずっとアイシンでプレーして、引退後は会社に残るといった道もありましたが、チャレンジしたいという気持ちが強くなってきました。当時30歳、結婚もして子供も二人いました。プロになれば成績を残せなければ即クビなので、不安はすごくありました。でも妻の後押しもあって、踏み切ることができました。

琉球ゴールデンキングスとプロ契約して、家族で沖縄に。家の前がすぐ海で、小さな子供たちにとっては楽しかったと思います。bjリーグ最後の年に、琉球で優勝もできて、プロとしてやっていけるという自信になりま

した。「ファンのために」というプロとしての自覚も芽生えました。

栃木ブレックスでのタイトルと大怪我

2017年に栃木(現宇都宮)ブレックスに移籍して、1年目にベスト3P成功率賞を獲れ、今まで磨いてきたものが形になったと実感しました。でも、より成長したいと思って迎えた翌年、練習中に大怪我をしてしまいました。

病院で右膝前十字靭帯断裂、右膝外側半月板損傷の診断を受けたときは、終わったなど。この先、どう復帰するかイメージもできなかった。

リハビリ期間は気持ちの浮き沈みがあって、チームの勝利は嬉しい半面、焦りもありました。でも、根がプラス思考。元に戻すのではなく、新しい膝を育てているんだと考え方を変換し、ポジティブに捉えました。

8月に怪我して、復帰できたのは3月。復帰後は、体を労わり、微妙な変化にも気を配るようになったので、コンディションはかえって維持しやすくなりました。

越谷アルファーズで、新たなチャレンジ

ブレックスで6年間プレーしました。最後の年はベンチにも入れないこともあって、すごく悔しい思いもしていた。38歳になっていたのだから、あと何年できるかわからないことを考えると、必要としてくれるチームでチャレンジしたいという気持ちになっていました。

声をかけていただいた越谷は、カルチャーとしてバスケットが街に根付いていこうとしている途上で、ファンと一緒に成長していくところにも魅力を感じました。

今期は新加入の選手も多く、一から作っているチーム。その中で安齋ヘッドコーチが意図していることを浸透させるのも自分の仕事と思っています。経験を積んで、勝負どころで何をすべきかは理解できていますので、それをコートで体現したいです。

プロの世界に入った当時は32、3で引退する人が多かったのだから、自分もそのくらいかなと。今40歳ですが、まさか、ここまでやるとは思っていませんでした。いろいろな人に支えられてプレーできています。両親も子供の頃からずっと応援してくれて。でも、一緒に外食したときにお店の人に、喜多川修平って知ってる?とか聞くのは、ほんとやめてほしいです(笑)。

上手くなりたい思いは、バスケットを始めた頃と変わりません。今、BIでやっている自分より年上の方は片手で数えられるほどになりました。でも、まだ体も動くし、チームに貢献できている実感があるので、一年でも長くバスケットできたらと思います。いずれその時が来るのですが、それまでやり切りたいです。